

一、ヨブを襲った試練

ヨブ記が指定されたので、改めてヨブ記を読んでみました。全部ではありません。4章から9章ぐらいまでです。そうしますと、あることに気づきました。試練の中にあるヨブを諭そうとしたエリファズ、ビルダデが、神のことをまことしやかに語っているのですが、神を見ているようで見ておらず、ヨブのことばかりを見ているという姿でした。一方のヨブは、エリファズやビルダデに「答えている」というかたちをとり、自身であったという姿です。

さて9節に「雲は消え去ります。そのように、よみに下る者は上っては来ません。」とあります。そのように、私は陰府に下る。であるなら、私の人生はいったい何だったのか」という世界観であり、人生観です。

ヨブ記が指定されたので、改めてヨブ記を読んでみました。全部ではありません。4章から9章ぐらいまでです。そうしますと、あることに気づきました。試練の中にあるヨブを諭そうとしたエリファズ、ビルダデが、神のことをまことしやかに語っているのですが、神を見ているようで見ておらず、ヨブのことばかりを見ているという姿でした。一方のヨブは、エリファズやビルダデに「答えている」というかたちをとり、自身であったという姿です。

ですが紀元前2世紀頃に変化が現れました。死んだラザロと、マリアの姉であつたマルタが、イエスさまに語つたことばに表れています。ヨハネ11・24マルタはイエスに言つた。「終わりの日のみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」がそうです。それまで、人は死んだら陰府に下ると受け止めていたユダヤ人に変化が現れています。理由は、ペルシアの宗教の影響であつたと言われています。私は、「影響」も然る事ながら、人々あつたやハウェ信仰がペルシアの宗教に刺激されて、そのように「脱皮」したものであつたと受け止めています。ところがイエスさまは、当時のユダヤ人が度肝を抜かすことを語らされました。ところがイエスさまは、彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。」と。この出来事以前に、こんな」とも語っています。ヨハネ6・40わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせることなのです。」と。

キリストは、「在世当時、すでに死の先のことを見ておられたことが分かります。

ですが紀元前2世紀頃に変化が現れました。死んだラザロと、マリアの姉であつたマルタが、イエスさまに語つたことばに表れています。ヨハネ11・24マルタはイエスに言つた。「終わりの日のみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」がそうです。それまで、人は死んだら陰府に下ると受け止めていたユダヤ人に変化が現れています。理由は、ペルシアの宗教の影響であつたと言われています。私は、「影響」も然る事ながら、人々あつたやハウェ信仰がペルシアの宗教に刺激されて、そのように「脱皮」したものであつたと受け止めています。ところがイエスさまは、彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。」と。この出来事以前に、こんな」とも語っています。ヨハネ6・40わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせることなのです。」と。

ヨブは「雲は消え去ります。そのように、よみに下る者は上っては来ません」と語っています。「自分のいのちが終わったときに、私は陰府に下る。であるなら、私の人生はいったい何だったのか」という世界観であり、人生観です。

赤ちゃんが生まれた時を人生の出発点と考えるなら、人によってかなりの格差があります。こればかりは、受け入れるしかないと思います。

ヨブが重い皮膚病らしき病に冒されたのは、ヨブが虚弱体質であつたからです。ヨブが虚弱体質であつたからとは決めつけられません。ヨブ記においては、プロローグで、主からの許可を得たサタンの働きであると解説されています。ですがこれは、ヨブ記本又よりも後に加えられた解説であると私は理解しています。現実の出来事は、一日のうちに家族を失い、その後、重い皮膚病らしき病に冒されてしまつたことです。こればかりは、ヨブには防ぎようのないことでした。私たちも同じです。人生には防ぎようのない、試練がやつてまいります。もちろん試練なんかには遭わない方がよいと思います。「主の祈り」にも「我らをこころみにあわせず、悪より救いいだし給え」とあるくらいですから。ですが、やつてしまつたものについては、それを受け止め、受け入れるしかありません。

三、苦惱の意味は変わる

神の子イエス・キリストは、十字架の上で叫ばれました。マタイの福音書27章46節です。「三時」ころ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになつたのですか」という意味である。私は、イエスさまが十字架上で叫ばれたことばは、マタイとマルコが史実に近いと受け止めてあります。そうしますと、イエスさまが最後に叫ばれたことばは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになつたのですか」だったということになります。私たちと同じ肉、すなわち人として生まれられた神の子イエスさまが、最後に叫ばれたことばは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになつたのですか」でした。私たちに適用するなら、「神さま、どうしてあの子は助からずに死んでしまつたのですか」「神さま、祈つていたのに、どうしてこの子はハンティキヤップを持って生まれたのですか」に通じるものがあります。

この子はハンティキヤップを持って生まれたのですか」と思います。考えてみれば、罪のない神の子イエスさまが、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになつたのですか」と祈られたのですから、自分の願つたようにならなかつたとしても、それを受け止めて行くのが、キリストを信じる信仰者の歩みかと思ひます。